

命の大切さ

小坂井中・1 藤田 風雅

僕には大好きだったおじいちゃんがいます。

今はもう天国に行ってしまっただけで、おじいちゃんとの思い出は、僕の心の中でずっと生き続けています。当たり前だと思っていた時間は、当たり前でなく、特別な時間だったのだと今になって実感しています。

小学校三年生から、おじいちゃんが塾やサッカーの送り迎えをしてくれました。家から塾までは少し遠く、自転車では行けないので、車で送迎してくれました。

車の中で僕たちはいろいろな話をしました。学校であったこと、サッカーでうまくいったこと、逆に失敗してしまったこと。おじいちゃんはどんな話も真剣に聞いてくれました。

落ち込んでいる時には、

「失敗してもいい。次、頑張ればいい。」

と励ましてくれました。その言葉に何度も勇気をもらいました。辛いサッカーの練習終わりも、汗だくになった僕をいつも優しい顔で迎えてくれたのを今でも覚えています。

僕が試合に出られなかったときには、

「よくがんばった。」

と声をかけてくれたのが、とてもうれしかったです。悔しい気持ちでいっぱいだったけど、おじいちゃんの一言で少しだけ心が軽くなりました。

おじいちゃんは、お母さんの入れるコーヒーが好きで、よく朝ごはんを食べにきていました。一緒に食べる時間は楽しくて、いつもより美味しく感じました。

お風呂にもよく一緒に入りました。背中を流してもらい、一緒に浸かりながらいろいろな話をするのが好きでした。

どれもかけがえのない思い出です。

ある日、おじいちゃんが体調を崩して入院しました。初めは、すぐに元気になると思っていました。でも、会うたびに痩せていき、食べる量も元気な頃の半分ほどに減りました。

病気の進行はとも早く、もう長くはないと感じていたので、会いに行くことが増えました。

おじいちゃんは会うたびに

「頑張つて治す。」

と笑っていました。だんだん話せなくなりました。

入院生活が長くなり、髪の毛も伸び放題になってしまいました。おじいちゃんはオシャレをするのが好きなので、髪の毛が伸び放題の状態では嫌だろうと思い、美容師のお姉ちゃんと一緒に病院で髪の毛を切つてあげました。もう話すことができなくなっていたけど、おじいちゃんはとても喜んでるように見えました。

それから数日後、僕の小学校の卒業式がありました。僕は中学校の制服をおじいちゃんに見せたくて、卒業式が終わったあと、そのまま病院に向かいました。寝たきりのような状態でしたが、ちゃんと目を開けて制服姿を見てくださいました。おばあちゃんがおじいちゃんの手を握つて一緒に卒業祝いをくれました。

これがおじいちゃんからの最後のプレゼントでした。

翌日の明け方、おじいちゃんは亡くなりました。まるで、僕の卒業式を待ってくれていたようでした。おじいちゃんがいなくなるということを信じられない気持ちと悲しみが込み上げてきて、涙がたきさん出てきました。

まだ七十四歳だったので、もっと長生きすると思っていました。

その時、人はいつ亡くなるかわからないのだと強く感じました。

お葬式にはたくさんの方がきてくれました。僕は、家族の一員として来てくれた方へのお礼をしました。おじいちゃんはたくさんの人と関わってきたのだと感じました。

人間はいつか死んでしまいます。死は誰もがいつかは迎えるもので、そのときがいつ来るかわかりません。だからこそ、今を精一杯生きていくことが大事なのだと思います。

おじいちゃんが亡くなったとき、僕はとても寂しくて、涙が止まりませんでした。もう二度と会えないのだと思うと、心に大きな穴が空いたような気持ちになりました。

けれど、おじいちゃんと過ごした日々を思い出すと、悲しみだけでなく、楽しかった思い出がたくさん心に浮かんできます。

このかけがえのない思い出は、僕の宝物です。

「人に優しくしろ」

これは、おじいちゃんが僕に教えてくれた言葉です。サッカークラブの友達とけんかをしてしまったとき、素直になれない僕を叱り、この言葉をかけてくれました。

おじいちゃんは、いつも優しく、どんな人にも笑顔で挨拶をしていました。この言葉とそんな姿を思い出すと、僕も友達や家族に優しく接したいと思うようになりました。

おじいちゃんの死を経験し、命には限りあることを強く感じました。人はいつ死ぬかわからないからこそ、今を大切に生きていかなければならないと思います。

勉強も遊びも一生懸命やりたいし、家族や友達に「ありがとう」の気持ちをきちんと言えたいです。

そして、おじいちゃんに胸を張れるように人として正しく優しく生きていきたいです。